

イギリスにおける戦死者の追悼式典と赤いポピー ―Great Pilgrimage の今―

吉田 正広（愛媛大学法文学部教授）

Remembrance Sunday and Red Poppies in Britain Today**Masahiro YOSHIDA****Professor, Faculty of Law and Letters, Ehime University**

The purpose of this paper is to consider the meaning of the official ceremonies to commemorate the fallen of the First World War in Britain today. In the beginning, I explain how the ceremonies at the Cenotaph and the Westminster Abbey for the war dead had developed from 1919 to the mid-1930s on the basis of articles of *The Times*. Then I show my experiences in London on several days around the Remembrance Sunday on 8 November 2015. For example, the Field of Remembrance in the garden of Westminster Abbey, the procession of the Orange Order through the streets, the broadcast of the Royal British Legion Festival of Remembrance on BBC One on Saturday, and official ceremonies at the Cenotaph on Whitehall on Sunday. The third task is to show and consider my experiences in Liverpool on 11 November 2015, when the two minutes silence was performed at 11 a.m. before the Liverpool Cenotaph in front of the St George's Hall. It was impressive one. A special installation Poppies Weeping Window was displayed there. And also in the St. John's Garden nearby a unique remembrance ceremony was performed by a local anti-nuclear movement whose members wear white poppies. In the end, I conclude that the remembrance ceremonies and events associated with red poppies today have certain political and social connotations, so we must understand the political aspects of commemorations on studying pilgrimages concerning the war dead.

はじめに

これまで筆者は、巡礼研究の一環として、イギリス人が第一次世界大戦の戦死者の墓を詣でる「戦争墓巡礼」について現地調査をもとにその概要を明らかにしてきた⁽¹⁾。また、第一次世界大戦の戦死者を追悼するために建設された戦争記念碑に関して、ロンドンおよびいくつかの地方都市の現地調査に基づいて、歴史資料としてどのように活用できるかという観点から整理してきた⁽²⁾。その中で、筆者は、ロンドンのホワイトホールにあるイギリスの戦死者追悼記念碑である「セノタフ」について、その成立の経緯およびそこでの式典の性格の変化について見通しを示しておいた。休戦記念日の式典は、「荣誉の死者」の追悼を中心としたものであったが、次第に、退役軍人である「荣誉の生者」への配慮や顕彰という性格が強くなっていくという見通しを提示し、戦死者の追悼式典そのものが政治性を帯びていることを示唆した。本稿は、ロンドンのセノタフを中心とした戦死者追悼式典がどのように発展し、その中で「巡礼」言説がどのように現れたのかを整理するとともに、第一次世界大戦100周年を経過した現在行われている戦死者の追悼式典が巡礼の観点から見たときにどのように見えるかについて、筆者の体験を踏まえて考えてみたい⁽³⁾。

筆者は、2015年11月6日から15日までロンドンおよびリヴァプールに滞在し、11月8日（日）のロンドンでのリメンバランス・サンデー（追悼日曜日）とリヴァプールでの11月11日午前11時の「二分間の沈黙」を経験した。周知のように、2014年7月は第一次世界大戦開戦百周年に当たり、ヨーロッパ各地でその記念行事が行われた。イギリスにおいても、帝国戦争博物館（Imperial War Museum）の活動を軸に、様々なイベントが行われた。その2年後の2016年7月はソムムの戦い百周年に当たり、関連の様々な式典も行われたが、2015年は二つの百周年の中間にあり、イベントに関しては比較的落ち着いた年であった。それでも筆者は偶然にも多種多様なイベントやキャンペーンに遭遇し、今回の滞在は第一次世界大戦100周年の一連のイベントを体験するとともに、それをめぐる政治的な議論に接する貴重な機会となった。

1 第一次世界大戦の戦死者追悼と巡礼言説

さて、第一次世界大戦の戦死者追悼式典はどのように変化してきたのだろうか。その概要を示すとともに、その中で「巡礼」言説がどのように現れたかについて、明らかにしておこう。

1919年7月19日にロンドンで第一次世界大戦の戦勝パレードが開催され、そのパレードの経路に当たるホワイトホールの通りの真ん中に、戦死者に敬意を表す目的でギリシア語の「空の墓」を意味する「セノタフ」と呼ばれるオブジェが建設された。古典様式のこの記念碑はパレード終了後撤去する予定で、木材と漆喰で建てられた。しかしながら、戦勝パレードの後、このセノタフに多数の女性たちが列をなして花を捧げるという現象が自然発生的に起こり、これを、新聞各紙が「巡礼」として言及することになる⁽⁴⁾。1919年11月11日にはこのセノタフで第1回の休戦記念日の式典が開催された⁽⁵⁾。このような一般の人々特に女性たちによって戦死者へ花を捧げるための「巡礼地」となったセノタフの存続を求めるキャンペーンが、大衆紙等でおこった⁽⁶⁾。このような反響を受けて、最終的にロイド・ジョージ内閣はホワイトホールの同じ場所に「恒久的な」セノタフを建設することを決定し⁽⁷⁾、1920年1月初めには「仮の」セノタフの撤去と「恒久的」セノタフの建設が始まった⁽⁸⁾。



図1 現在のセノタフ

このようにセノタフは、戦勝パレードの経路に臨時に建てられたものであったが、戦死者の母、妻、恋人など女性たちが花を捧げた「巡礼」の結果、同じ場所に石造の「恒久的セノタフ」が政府によって建設されることになったのである。この点は確認しておきたい。

そして、1920年11月11日の第一次世界大戦の休戦記念日には、新たな「恒久的セノタフ」の除幕が行われた。これが現在われわれの目にするセノタフである（図1）。この除幕にあわせて「無名戦士」の埋葬が行われた。「無名戦士」の遺体は前日にヴィクトリア駅に到着していたが、当日は駅からセノタフへは砲架に乗せられ最高の荣誉で運ばれ、セノタフから埋葬場所であるウェストミンスター寺院までは国王に付き添われて移動した。「無名戦士」のベルギーからフランス、ドーバーを経由してロンドンへの移送そのものが、「巡礼」であるかのように新聞紙上で言及された⁽⁹⁾。

また、公式の式典終了後は、女性たちのセノタフ「巡礼」がこれまで以上に大規模に行われた。1920年11月12日付けの『タイムズ』には、「大巡礼、何時間も待たされた追悼者の疲労、忍耐の試練、女性にとって過酷な重圧」⁽¹⁰⁾と題する記事が掲載され、前日の休戦記念日の式典後に女性たちがセノタフに花を捧げるために何時間も列をなして待っていたことを報じ、同紙はこれを「大巡礼」と規定している。11月13日には「セノタフに夜の巡礼者、終わらざる行列」と題する記事で、式典後の行列が夜間は少なくなったが、夜明けとともに人々が殺到したことを報じている⁽¹¹⁾。

さらに11月15日月曜日の『タイムズ』には「日曜日のセノタフ」と題する写真⁽¹²⁾と、「セノタフへの呼びかけ、国民的巡礼、ホワイトホールの素晴らしい光景」と題する記事が掲載され、全国各地から人々がロンドンに巡礼に来たことを「国民巡礼」と言及した⁽¹³⁾。そのほかにも、「100万以上の巡礼者、本日、ホワイトホールとウェストミンスター・アビーの交通が再開」には、「今や100万人以上の人々がホワイトホールのセノタフを訪れ、ほぼ同じ人数の人々がウェストミンスター・アビーにある無名戦士の墓を通り過ぎた」⁽¹⁴⁾と記されている。女性たちがセノタフに花輪や花を捧げる「巡礼」はクリスマスにも起こった。今回は「ホーリー」（ヒイラギ）の花輪であった。

以上の記事からは、セノタフと無名戦士の墓に女性たちを中心とした人々が列をなして花を捧げる行為が「巡礼」と表現され、訪問する人々を「巡礼者」と言及されたことがわかる。この場合、ウェストミンスター寺院の無名戦士の墓とホワイトホールの「空の墓」のセノタフのどちらが重視されたのであろうか。この答えを明確に示したエピソードが、1923年10月に起きた。その年の11月11日は日曜日に当たったため、政府は式典をウェストミンスター寺院で開催する計画を発表した。しかしながらこの計画が発表されると、公式式典のセノタフでの開催を主張する意見が高まり、大衆紙のキャンペーンもあって、政府はウェストミンスター寺院での式典開催を撤回せざるを得なくなった⁽¹⁵⁾。ここに示されているのは、セノタフの重要性であり、それは、セノタフが「霊廟」として特別の意味を持っていると考えられたからと解釈できよう。

さて、1920年11月11日に頂点に達した戦死者への追悼というこの日の性格は、1921年11月11日の休戦日以降、少しずつ変化していくように思われる。この年の休戦記念日には、当時「フランダース・ポピー」と呼ばれた赤いポピーの販売による退役軍人に対するチャリティー活動が始まった⁽¹⁶⁾。またこの時期には戦後の不況の結果、退役軍人の失業問題が深刻となり、失業者のセノタフ巡礼も起きている。

また、1925年11月11日の休戦記念日に開催が予定されていたアルバート・ホールでの「勝利舞踏会」（それ自体は退役軍人へのチャリティー活動でもあり、11月11日の前日に開かれることが多かったが、この年は11月11日の開催を予定していた）の開催の是非をめぐる論争とその中止という事態は、1925年においても休戦記念日は戦死者追悼に人々がこだわっていたことを象徴する出来事でもあった。その後、1927年11月11日には、第1回追悼フェスティバル **Festival of Remembrance** が英国退役軍人協会の主催でアルバート・ホールにおいて始まった⁽¹⁷⁾。この模様はBBCを通じて放送されることになる。

さらに、1928年にはウェストミンスター寺院の庭で「追悼庭園」 **Field of Remembrance** が始まり、1930年の休戦記念日にはポピー・アピールの一環として注目される⁽¹⁸⁾。この間、セノタフでの政府主催の公式式典を中心に、赤いポピーの販売、英国退役軍人協会主催の追悼フェスティバル、ウェストミンスター寺院の庭での「追悼庭園」など、11月11日前後の1週間は、様々なイベントが、ロンドンにおいて開催されることになる。この時期のロンドンでは、シティでのロンドン市長就任行列も加わり、1920年代末には、今日にまで受け継がれる戦死者の追悼と退役軍人に対する支援の一連のイベントが出そろっていく。それ以前から11月初旬に行われていたロンドン・シティの市長就任行列「ロード・メイヤーズ・ショー」において、シティに関連する部隊のパレードがそのイベントに組み込まれている。さらに、1933年には、**Co-operative Women's Guild** による白いポピーの販売が始まり、その翌年には白いポピーの販売に **Peace Pledge Union** が関与し、平和運動につながることになる⁽¹⁹⁾。

以上のように、休戦記念日前後の式典や様々なイベントは、歴史的に形成され複合的なものとして発展した。それらはいずれも現在に引き継がれているのである。

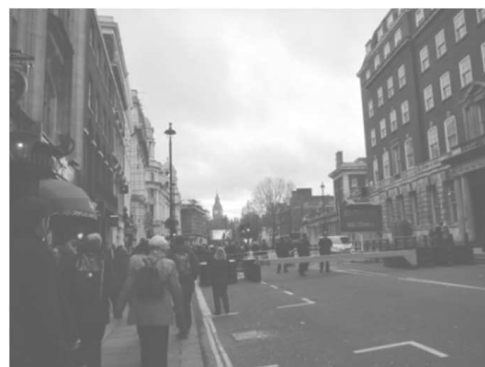


図2 式典会場のホワイトホール通り

2 2015年11月8日ロンドンのリメンバランス・サンデー

現在でも毎年11月11日の直近の日曜日は、「リメンバランス・サンデー」として政府主催の追悼式典が行われている。2015年は11月8日日曜日に当たる。以下では11月8日のリメンバランス・サンデー前後のロンドンの様子について、筆者の体験をもとに紹介する。

式典の会場は、トラファルガー・スクエアーから国会議事堂前に至るホワイトホール通りである(図2)。周辺はロンドンのもっとも有名な観光地でもある。トラファルガー・スクエアーからホワイトホール通りを少し行ったところから通行止めになり、午前10時ごろには多くの人々が会場に集まり始めた。また、この通りには何カ所も巨大な画面が用意され、BBCの実況放送の画像が映し出され、セノタフで行われる式典の様子を画面で見ることができる。セノタフの近くは政府関係者や軍隊、教会関係者、特別の招待者等が陣取る。一般の人々は制限されてはおらず、時間をかければたどり着けるが、すごい人混みとなる。

今回筆者は、トラファルガー広場の近くで、セノタフからはかなり離れた場所で、巨大なモニター画面の近くを選んだ。私の前には、行進を待つ様々な団体がいた。ボーイスカウトなどの若者たちの団体もいる。通りは、秩序正しく整列した様々な退役軍人の団体



図3 スクリーンに映し出された女王の献花



図4 行進する退役軍人

で埋まっていった。

セノタフで行われる式典は、女王の献花に始まり（図3）、王室関係者の献花の後、首相と野党党首、元首相などの献花が続く。なお、今年は当初、行進を待つ退役軍人に配慮して、時間短縮のため政治家は一斉に献花する予定であったが、野党からの批判で、従来通り順番に献花した。以上の様子はすべて巨大なモニターに映し出される。11時のビッグベンの鐘の音とともに、大砲が鳴り、2分間の沈黙（two minutes silence）が始まった。2分後大砲の合図で沈黙は終了し、追悼ラップが続く。

その後は、退役軍人の行進が始まる。先頭は、特別に招待された参列者と赤い服を着たチェルシー・ペンショナーである。後者はチェルシーホスピタル（廃兵院）で余生を送る退役軍人であり、彼らの赤い制服は、戦争にかかわる様々なイベントにおいてシンボルとなっている。その後、陸海空の様々な部隊、看護部隊、ボーイスカウトなど、様々な団体が行進する（図4）。行進する団体は、代表者が花輪を女性の担当者に手渡して、セノタフの基壇に置いてもらう。以上の様子は、巨大なモニターに映し出され、セノタフの現場の音声も聞くことができた。

私が陣取った近くには、ケニア人部隊の退役軍人が行進を待っていた。彼らが出発する時には、大きな拍手がわき起こった（図5）。また、モニターには、ネパール人のグルカ兵の姿も見え、道路の反対側をこちらに戻ってくるバグパイプ奏者に率いられたグルカ兵部隊の姿が印象的であった。その際にも、大きな拍手が起こった。

行進が終わる頃には観客も少なくなり、かなり自由に移動できるようになったので、セノタフの近くまで行ってみることにした。セノタフ近くに行ってみると、一般の人々、といっても制服を着た民間の団体のメンバーがポピーの花輪をもって、セノタフが一般に開放されるのを待っているようであった。しばらくつきあってみることにした。そうしているうちに、救世軍 Salvation Army の礼拝が行われるとの案内がスピーカーであった。救世軍の団体が、国旗と救世軍旗を掲げて行進してきた（図6）。救世軍は貧民救済を積極的に行うプロテスタント系のキリスト教団体で、軍隊組織にならい、女性の活動が特徴でもある。制服は軍隊の制服を取り入れた独自のものであり、特に女性の服装が印象的である。日本でも京都や東京に教会があり、年末の「社会鍋」が知られている。礼拝は、賛美歌で始まり、聖書の語句などが読まれ、賛美歌で終わった。その間、30分ほどかかったと思われる。救世軍の礼拝は、屋外でブラスバンドによる賛美歌の演奏が特徴であり、イギリスの映画等でもよく取り上げられるが、私としては初めてその場に遭遇し、非常に感動的であった。日本に帰国したから当時の新聞等の資料を調べてみると、ロンドンのシティで行われた様々な戦争記念碑の除幕式には救世軍のブラスバンドを伴った礼拝が行われることが多いことがわかった。今回の救世軍の礼拝との遭遇も偶然ではあったが、歴史的にみれば、ロンドンの追悼式典には救世軍の礼拝が常に付随していたのである。

式典の終了後は、柵が設けられるが、誰でもセノタフに近寄れる。私も近寄ってみた。セノタフの基壇には女王及び王室の花輪が掛けられ、首相と野党党首など政治家の花輪もある（図7）。また、一番低い基壇には行進した団体が置いていった花輪が数多



図5 行進するケニア人の退役軍人



図6 救世軍のセノタフ礼拝



図7 式典終了後のセノタフ



図8 ポピー・ファクトリー

く置かれている。その後移動すると、近くのパブでは、退役軍人がビールを飲みながら、歌う姿が見られた。行進終了後のパブも退役軍人の楽しみであることもわかった。

今回のロンドンで印象的だったのは、その前日の土曜日のウェストミンスター寺院での出来事である。例年通り、ウェストミンスター寺院の庭には「追悼庭園」が開催され、寺院の入り口近くには、チャリティーとしてポピーや小さなポピーの十字架を販売する「ポピー・ファクトリー」(図8)が置かれ、そこで購入したポピーの十字架を部隊ごとに区切られた区画に打ち付けていく(図9)。これもチャリティーである。

この「追悼庭園」を見ていたら、通りで太鼓の音がして、50人ほどの黒い服を着た行進する一団に遭遇した(図10)。その時には、これもセノタフに向けての行進としての「巡礼」であると理解した。しかしながら、この一団は、後で調べると、旗の文字や首に掛けたオレンジ色のたすきから判断して、オレンジ団であった。これは1795年にアイルランドのプロテスタントが組織した団体で、プロテスタントのオレンジ公ウィリアム(ウィリアム三世)が1690年にボイン川の戦いでカトリックのジェームズ2世に勝利したことになむ。政治的には、北アイルランドの連合王国への連合unionを主張する保守的な立場に立つ組織である。この出来事は、戦死者の追悼が決して政治と無関係ではないことを思い知らされた。

その後ホテルに帰ってテレビをつけてみると、BBCでは「フェスティバル・オブ・リメンバランス」を中継していた。フェスティバルは、毎年、追悼日曜日の前日の土曜日に、午後2時と午後7時の2回、アルバート・ホールで開催されている。その司会は、BBCの人気キャスター、ヒュー・エドワーズが務め、午後7時の回には王室も参列する。フェスティバルでは過去の戦争の戦死者だけでなく、その年の戦死者の家族を招いたりする。この年は、グルカ兵のダンスがあり、第二次大戦で日本軍と戦った退役軍人も参加していた。また、ロッド・スチュワートとグレゴリー・ポーターが出演し、歌っている。クライマックスは、戦死者名簿Roll of Honourの上にポピーの花びらが大量に降り注ぐ場面である。率直な感想としては、イギリスの軍隊を顕彰すると思えないものである⁽²⁰⁾。この年、これまで放映してきた退役軍人協会の旗の入場の場面はBBCでは放送されなかったが、この催しの軍事的な色彩を強くもっているからだと思像できよう。

3 リヴァプールの11月11日

追悼日曜日には、ロンドンのみならず、全国各地で追悼式典が行われているが、第一次世界大戦の休戦日に当たる11月11日午前11時にも、各地の記念碑において、様々な式典が行われた。筆者の経験したリヴァプールの戦争記念碑での11月11日午前11時の様子を紹介したい。

11月10日の夕方、リヴァプールに着いて街を散策して驚いたのは、町中が第一次世界大戦の戦死者追悼の様々なイベントで溢れかえっていたことである。国鉄のリヴァプール・ライムストリート駅の向かいにあるセント・ジョージズ・ホール(図11)には、「ポピー・ウィーピング・ウィンドウ」Poppy Weeping Windowと名付けられた赤いセラミックのポピーで構成される作品が展示



図9 追悼庭園



図10 オレンジ団の行進



図11 セント・ジョージズ・ホール



図12 ポピー・ウィーピング・ウィンドウ

されていた。セラミックでできた赤いポピーが、巨大な建物の正面ポーチの屋根から地面にまで流れるように配置され、その周りには戦場の塹壕を象徴する土囊が積まれていた（図12）。夜には赤いポピーのライトアップとともに、ホール最上部が赤い光で照らされ、まるで赤い血がホールの屋根から正面ポーチの上部に空いた窓を通して地面に流れているかのようにであった。これは、案内板によると、14-18 Now WW1 Centenary Art Commissions（第一次世界大戦100周年芸術委員会）⁽²¹⁾とリヴァプール市議会が主催し、1915年11月7日から2016年1月17日まで開催された展示である。近くの案内板には、「Weeping Window（「涙を流す窓」）は、数千個の手作りのセラミック製のポピーが高い地点から地面まで流れるように配置されたものである。これは、芸術家のポール・カミンズとデザイナーのトム・パイパーによる戦争開始百周年を記念する二つの立体芸術のうちの一つであり、最初は2014年ロンドン塔のインスタレーション「血塗られた赤の大地と海」Blood Swept Lands and Seas of Red⁽²²⁾の一部として創案されたものであった。これは、連合王国規模の14-18 Now—第一次世界大戦100周年芸術委員会—の一部としてリヴァプールに運ばれた」とある。

ウィーピング・ウィンドウが配置されたセント・ジョージズ・ホールの前に、「リヴァプール・セノタフ」と呼ばれるリヴァプール市の追悼記念碑が置かれている（図13）。ここがリヴァプールでの追悼式典の中心である。11月11日午前11時の様子を見ようと、筆者は1時間ほど前からこの場所に来ていた。ホールの裏手にはセント・ジョンズ・ガーデン St. John's Garden があり、そこにはリヴァプールにかかわる政治家や実業家などの像、ボーア戦争の戦死者を追悼するための記念碑、さらには、比較的近年に作られた多種多様な戦争記念碑が置かれている。図14は式典の直前に、庭園の戦争記念碑群を観察する子どもたちの姿である。なお、写真の中央の像は「グラッドストーン記念碑」で、子どもたちは胸に赤いポピーの造花を着けている。式典ではこの子たちがホール正面の記念碑に花輪を捧げることになる。

午前11時が近づくにつれて、セント・ジョージズ・ホールの前に人々が集まりだした。やがて人々はホールの巨大な階段に集まり、英国退役軍人協会 Royal British Legion の旗をもった旗手がやってきた。あの子どもたちも前の方に陣取っている。午前11時になると「2分間の沈黙」が行われ、終了とともに追悼ラッパの演奏、子どもたちによるポピーの花輪の献花が行われた（図15）。特に来賓がいるわけではなく、人々が集まって終了とともに三々五々解散するという至ってシンプルなものであった。それだけに、このリヴァプールにおける11月11日午前11時の経験は、かつて「巡礼」と言われた一般の人々が記念碑を詣でる行為と相通ずるのではないかと感じた次第である。翌日、記念碑を訪れて見たが、捧げられたポピーの花輪が重なるように置かれていた。また、偶然にも、幼稚園ぐらいの子どもたちの10人ほどのグループが記念碑に来ていた。ここにも、世代を越えて戦争の記憶を伝える意志を感じた。

11月11日午前11時の「2分間の沈黙」の後、疲れたのでベンチに座ろうと思って、ホール裏手のセント・ジョンズ・ガーデンを再び訪れてみた。全くの偶然であるが、そこでは地元の反核グループによる追悼式典が行われていた（図16）。白いポピーは、1933年に始まり、すべての戦争犠牲者を追悼する意味を持ち、平和運動で



図13 リヴァプール・セノタフ



図14 セント・ジョンズ・ガーデン



図15 二分間の沈黙



図16 地元反核グループの追悼式典

もある。また掲げられていた白い旗には、Pax Christi Liverpool Reconciliation とある。これはカトリックの平和運動であり、アイルランド移民の多いリヴァプールを象徴する。また、この追悼式典を主催するのは、「マージサイドCND」という団体で、リヴァプールに根拠を持つ核兵器廃絶運動である。芝生には、白いポピーの花輪も置かれていた。この「マージサイドCND」の旗には、「London → Aldermaston」の記載があった。オルダーマストンはイングランド南部バークシャーにある核兵器研究機関のある町で、1950年代60年代にはロンドンからオルダーマストンへの行進 Aldermaston Marches が行われた。ギターで歌っている人は赤いポピーと白いポピーの両方を着けている（図17）。

もう一つ、このセント・ジョンズ・ガーデンに接する歩道に「われわれはヒルズバラの悲劇を忘れない」We will remember Hillsborough Disaster と刻まれた巨大な円筒形の記念碑が建てられていた（図18）。これは1989年4月15日にシェフィールドのヒルズバラー競技場で起きた96名のリヴァプールF Cサポーターの死を追悼するための記念碑である。むしろ、事故に際してその行動を非難されたリヴァプールF Cサポーターの名誉を回復するための組織「ヒルズバラー正義キャンペーン」によって、リヴァプールの名誉回復運動そのものを記念するための記念碑である。ここには、「YNWA DAD」の文字⁽²³⁾をかたどった、赤い縁取りの白い花輪が置かれていた。これは、ヒルズバラー競技場での96名の死者を追悼する花輪である。ホテルに帰ってテレビで見たBBCの地方ニュースでは、セント・ジョージ・ホールでの式典の様子が映されていたが、そのあと、偶然にも、この日、ヒルズバラーの事故の死因に関する再調査が始まったことが報道され、それにあわせて、ヒルズバラーの悲劇の映像とリヴァプールでの葬列の当時の映像が放映されていた。

今回のリヴァプールでの体験は、赤いポピーに象徴される公式の戦死者追悼式典やキャンペーン、それとは政治的に一定の距離を置きつつ白いポピーを着けた地元反核グループによる独自の戦死者追悼式典、さらにはリヴァプールという地域社会の名誉やアイデンティティにかかわるサッカー場の事故の犠牲者の追悼碑がセント・ジョージズ・ホールとセント・ジョンズ・ガーデンという隣接した空間で、また11月11日という時間において、さらに、戦争を経験した世代から子どもたちに至るあらゆる世代を通じて、一体化した形でリヴァプールの戦死者追悼式典が行われている様子を垣間見ることができた。



図17 白いポピーと赤いポピー



図18 「ヒルズバラーの悲劇」記念碑

おわりに

最後に、今回のロンドンのリメンバランス・サンデーの公式式典に出席した労働党首コルビー氏のメッセージを『ガーディアン』紙の記事に依拠しつつ、紹介してみたい。

2015年11月9日付けの『ガーディアン』紙の一面には、式典でセノタフに赤いポピーの花輪を捧げた労働党首コービン氏 **Jeremy Corbyn** の写真が掲載された。この写真には、「昨日セノタフにおける追悼式典でのジェレミー・コービン。労働党首は赤いポピーを着けないかもしれないと示唆していた。」とのキャプションが添えられている。また、1面の「コービンは軍の介入に不満」と題する記事の中では、「コービン氏は、数週間前には赤いポピーを着けないと示唆していたが、赤いポピーを着けていた。また、彼は国歌斉唱にも参加した。このことは、労働党首になった最初の週に彼が参加した式典で沈黙したことによって引き起こされた論争から学んだことを示している」とあり、労働党左派出身のコービン党首は様々な論争をまきおこしていたことがわかる。さらに、写真のポピーに添えられた彼のメッセージには、「すべての戦争の戦死者を追悼して。世界平和を実現することを決意しよう。」と書かれていた⁽²⁴⁾。

リヴァプールにおける政治的に対立する様々なイベントは、「ヒルズバラーの悲劇」に関する記念碑や式

典を含めて、地域社会のアイデンティティになっているようにも思えた。しかしながら、ロンドンでのオレンジ団の行進や労働党首の行動を考えると、赤いポピーに一定の政治性をわれわれは読み取らなくてはならない。第一次世界大戦百周年をめぐる様々な式典やイベントは現在進行中であり、今後の展開を含めて、その歴史的意味について今後考えていきたい。

- (1) 吉田正広「イギリス人の戦争墓巡礼と追悼文化」愛媛大学「四国遍路世界の巡礼」研究会編『巡礼の歴史と現在—四国遍路と世界の巡礼—』岩田書店 2013 年。
- (2) 吉田正広「イギリス地方都市の戦争記念碑」愛媛大学「資料学」研究会編『歴史と文学の資料を読む』創風社出版、2008 年。吉田正広「イギリスにおける第一次世界大戦の「記憶」と新聞資料」愛媛大学「資料学」研究会編『歴史の資料を読む』創風社出版、2013 年。
- (3) 戦死者の追悼式典を巡礼の観点から論じたものに、David W. Lloyd, *Battlefield Tourism: Pilgrimage and the Commemoration of the Great War in Britain, Australia and Canada, 1919-1939*, Oxford, 1998 がある。
- (4) 『サンデー・タイムズ』には、戦勝パレードの「行列がホワイトホールを通過してしまっただけ、何千という人々が、「栄誉ある死者」のためにそこに建てられたセノタフに巡礼した」という記事が掲載された。すでに戦勝パレード直後に人々の「巡礼」が起こったと言及された。 *The Sunday Times*, July 20, 1919, p.14.
- (5) 1919 年 11 月 11 日の休戦記念日を報じた『タイムズ』には、「巡礼」の語は使われていないが、セノタフに多くの花輪や花が捧げられた様子が報告された。一般の人々が捧げた「貧しい花束」についての言及が印象的である。 *The Times*, November 12, 1919, p. 16.
- (6) 1919 年 12 月 23 日の『タイムズ』は、「セノタフのクリスマス・リース」と題する記事で、「ホワイトホールのセノタフの基壇が勇敢な死者を記念してそこに置かれる花で覆われないことは決してないが、経験の示すところでは、特定に時期にその数が増加し、花輪の上に花輪が積み重なる。有名な戦闘の周年祭や休戦記念日には多くの巡礼者がその記念碑を訪れている。今やクリスマスも特別な行事の一つとなるように思える」と報じている。 *The Times*, December 23, 1919, p. 7.
- (7) 1919 年 12 月 10 日付けの『タイムズ』には、政府が正式に「セノタフのレプリカ〔恒久的セノタフ〕を現在の場所に建設する」ことを議会で発表したとある。 *The Times*, December 10, 1919, p. 20.
- (8) "The Cenotaph. Temporary structure to be pulled down next week", *The Times*, January 14, 1920, p. 12.
- (9) *The Times*, November 11, 1920, p. 14 には、「無名戦士」のフランスからロンドンへの移送について詳しく報じられた。
- (10) "The Great Pilgrimage. Mourners' Weary Hours of Waiting. A Test of endurance. Severe strain on women", *The Times*, November 12, 1920, Supplement, p. ii.
- (11) "The People's Homage. Night Pilgrims at the Cenotaph. Unending Procession", *The Times*, November 13, 1920, p. 10.
- (12) "Sunday at the Cenotaph", *The Times*, November 15, 1920, p. 9.
- (13) "Call of the Cenotaph. A National Pilgrimage. Wonderful Scenes in Whitehall", *The Times*, November 15, 1920, p. 12.
- (14) "Over 1,000,000 Pilgrims. Traffic resumed in Whitehall. Abbey open again to-day", *The Times*, November 15, 1920, p. 14.
- (15) "Armistice Day. Cenotaph Service to be held", *The Times*, October 23, 1923, p. 12.
- (16) "The Poppies of Flanders", *The Times*, November 12, 1921, p. 6.
- (17) "Remembrance. The Prince at the Albert Hall", *The Times*, November 12, 1927, p. 7.
- (18) "Flanders Poppies. Practical help for the Ex-service men", *The Times*, November 12, 1930, p. 8.
- (19) 白いポピーについては、<http://www.ppu.org.uk/whitepoppy/index.html> (2017 年 1 月 14 日) を参照。
- (20) <http://www.bbc.co.uk/programmes/p038j9yf/p038j8c1> (2017 年 1 月 15 日)
- (21) 14-18 NOW は、2012 年 10 月に英国政府が第一次世界大戦 100 周年を記念する計画を発表したこと

に起源を持つ。計画には「第一次世界大戦 100 周年文化プログラム」というアート・プログラムが含まれていた。このプログラムが後に独立組織として 14-18 NOW となり、政府の一定の資金援助を受けつつ、独立の理事会を持つことになった。帝国戦争博物館が主催し、ロンドンの帝国戦争博物館に本部が置かれている。文化、メディアおよびスポーツ省によって資金援助を受け、宝くじに関係する Heritage Lottery Fund の援助も受けている。<https://www.1418now.org.uk/support-us/> (2017 年 1 月 8 日アクセス)

(22) Blood Swept Lands and Seas of Red とは、第一次世界大戦勃発 100 周年を記念して 2014 年 7 月 17 日から 11 月 11 日にかけてロンドン塔の堀に配置された 888,245 個の赤いセラミック製ポピーを配置したインスタレーションであり、その名称は、第一次世界大戦に従軍し死亡した無名兵士の詩に由来する。筆者もこれを是非見たいと思っていたが、残念ながら筆者がロンドンを訪れた 2015 年 11 月 7 日にはすでに撤去されていた。https://en.wikipedia.org/wiki/Blood_Swept_Lands_and_Seas_of_Red (2017 年 1 月 8 日)

(23) Y N W A の文字は、リヴァプール F C の試合中にサポーターたちによって歌われる曲 You'll Never Walk Alone のことであり、「君は一人で行くのではない」との意味であり、D A D は父親のことである。アンフィールド競技場の「ビル・シャンクリー門」にもうけられた追悼記念碑にも同じ花輪が捧げられていた。

(24) *The Guardian*, November 9, 2015, pp. 1, 9.